

Symposium:

Landscape Representation of the 21st Century Art — The Recognition of Nature and Construction of Landscapes

Gail Levin Hans Dickel

Liu Chengji Krystyna Wilkowitzska

国際シンポジウム

21世紀の風景表象 — 風景の構築と自然の認識 —

主催■立命館大学国際言語文化研究所、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B) (課題番号:22320031)

「認識と構築」の自然の風景像 — 21世紀の風景論

後援■美学会

9:30 受付開始

—— 進行: 要 真理子 (大阪大学)

10:00 開会挨拶

10:10 シンポジウムのテーマ説明

【第1部】 10:30-13:00 (全訳資料・通訳あり)

ゲイル・レーヴィン (ニューヨーク市立大学) 「ジャクソン・ポロックとリー・クラスナー、自然の新概念」

ハンス・ディッケル (フリードリヒ・アレクサンダー大学) 「自然とテクノロジーを結ぶ芸術作品」

—— ディスカッション: 仲間 裕子 (立命館大学)

【第2部】 14:00-16:45 (全訳資料・通訳あり)

刘 成紀 (北京師範大学) 「中国美学の農耕文化的特性と景観表現」

クリスティーナ・ウィルコツェウスカ (ヤギェウォ大学) 「風景と環境」

ラッファエーレ・ミラーニ (ポーロニア大学) 「美的対象としての風景美術」 — 紹介とコメント: 加藤 磨珠枝 (立教大学)

—— ディスカッション: 前田 茂 (京都精華大学)

【第3部】 17:00-18:00 (通訳あり)

ハネル・ディスカッション

「21世紀の風景表象 — 風景の構築と自然の認識 —」

—— 司会: 仲間 裕子

18:00 閉会挨拶

19:00 懇親会

2011年10月1日(土)
立命館大学衣笠キャンパス
創思館 カンファレンスルーム

自然のテーマ化は、美学・美術史研究においても、地球規模の自然破壊の進行という現実とともに必要性を増しています。そうした危機に瀕した外的自然がわれわれに現れる場として、今こそ「風景」が、従来の伝統的な枠組みを越えた新たな論究の中心に置かれるべきだと思われます。今世紀の緊迫した状況における「時代の風景論」はいまだ端緒についたばかりです。国際シンポジウム「21世紀の風景表象—風景の構築と自然の認識—」はこうした視座の下に、芸術が対峙した時代の自然意識を解明し、作品が主張する自然概念を析出する試みです。それぞれの歴史・文化、アイデンティティを顧慮する国際的な共同研究として、差異の認識に基づきながら、グローバル化した自然問題とかわる新たな風景論を模索します。

【パネリスト】

ゲイル・レーヴィン Gail Levin

ニューヨーク市立大学バローク校総合芸術学部特別教授。エドワード・ホッパー、国吉康雄、ジャクソン・ポロックなどの研究者として知られ、日本でも多くの大学や美術館で講演。単著、共編著に『リー・クラスナー伝』(2011)、『芸術家ジュディ・シカゴの誕生』(2007)、『倫理学と視覚芸術』(2006)、『アーロン・コーブランドのアメリカ：文化的視座』(2000)、『エドワード・ホッパー伝』(1995)他多数。またアメリカ国内外での展覧会のキュレーター活動も多く、巡回展、*Abstract Expressionism: The Formative Years* (1978)は、日本(西武美術館)でも開催された。

ハンス・ディッケル Hans Dickel

フリードリヒ・アレクサンダー(エアランゲン)大学芸術史研究所教授。近現代美術の研究者で、ハーヴァード大学、プラハ大学などで教鞭を執る。単著、共編著に『1960年以降の写真付きアーティストブック』(2008)、『第二の自然としての芸術』(2006)、『都市の芸術』(2003)、『クリスチャン・ボルタンスキー』(2001)他多数。2009年に、京都国立近代美術館、新国立美術館で講演。近年はゲッティ財団の研究プロジェクト「エアランゲン大学図書館所蔵の北欧後期ゴシック様式の版画・素描作品」の代表を務める。第33回国際美術史学会(2012年、ニュルンベルク)組織委員会委員。

刘成纪 Liu Chengji

北京師範大学哲学・社会学院教授。Frontiers of Philosophy in China 編集委員。専門は中国の古典美学であるが、西洋美学や現代の都市景観・公共芸術についても詳しく、中国の主要機関誌にも多数の論文を掲載。主著は、『欲望の傾向—物語における女性と文化』(1999)、『中庸の理想』(2001)、『麗しき美学—芸術と生命の再発見』(2001)、『物象の美学—自然の再発見』(2002)、『青山道場—荘子と中国の詩学精神』(2005)、『形而下の不朽—漢代の身体美学論考』(2007; 英語訳2008)、『自然美の哲学的基礎』(2008)。中国美学会理事。

クリスティーナ・ウィルコツェウスカ Krystyna Wilkowiecka

ヤギェウォ大学哲学研究所美学部教授。専門領域はアメリカ・プラグマティズム、ポストモダニズム、環境美学、新メディアアート論、日本の美学と幅広い。近年の編著のひとつに『異文化美学』(2004)がある。また日本の美学についてアンソロジーを刊行(Krakow, 2001, 2004)し、2011年5月にポーランドと日本との第1回美学の交流カンファレンスを開催した。英語で発表された編著に、『美学再考』(1999)、『四大元素の美学：地、水、火、気』(2001)、『脱構築と再構築』(2004)がある。国際美学会連盟ポーランド代表委員。第19回国際美学会(2013年、クラクフ)を主催。

ラッファエーレ・ミラーニ Raffaele Milani

ボローニャ大学文哲学部教授。比較美学を専門とし、風景に関する美学的考察に取り組む。エティエンヌ・スーリオ『諸芸術の照応』のイタリア語版を編集し(1988)、著書に、『美的範疇』(1991)、『優美の諸相、哲学、芸術、自然』(2009)、『ピクチャレスク』(1996、ハンベリー国際賞受賞)、『風景の美学』(2001、カラブリア国際随筆賞およびハンベリー国際賞を受賞、2012年に日本語訳刊行予定)など多数。フランス環境省「景観の認識から景観的行動へ」委員会メンバー(2004)。国際美学会連盟イタリア代表委員。※ペーパーによる参加

【司会】

仲間 裕子 Nakama Yuko

立命館大学産業社会学部教授。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了、文学博士。専門は西洋美術史・美学。著書に Caspar David Friedrich und die Romantische Tradition, Reimer Verlag, Berlin, 2011、『C.D. フリードリヒ、《画家のアトリエからの眺め》—視覚と思考の近代』(三元社、2007)、『美術史をつくった女性たち—モダニズムのあゆみのなかで』(神林恒道と共編著、勁草書房、2003)他。訳書にハンス・ベルティング『ドイツ人とドイツ美術—やっかいな遺産』(異言書房、1998)、『イメージ人類学』(平凡社、2012年刊行予定)などがある。

シンポジウム会場

立命館大学衣笠キャンパス 創思館1階 カンファレンスルーム

〈参考〉

交通アクセス

http://www.ritsumei.jp/accessmap/accessmap_kinugasa_j.html

キャンパス・マップ

http://www.ritsumei.jp/campusmap/index_j.html#KINUGASA

ACCESS & CAMPUS MAP [EN]

http://www.ritsumei.ac.jp/eng/html/about/abo_08.html

校園位置 (中文)

<http://www.ritsumei.ac.jp/cn/profile/map2.html>

学内での昼食には

・存心館食堂 (11:00-15:00)

・レストラン カルム (11:30-14:00)

・至徳館購買部コンビニエンスストア (10:30-15:00)

などがご利用いただけます。

【お問合せ】

21世紀の風景論研究会事務局 (立命館大学国際言語文化研究所内)

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

TEL 075-465-8164

MAIL Indscp21@st.ritsumei.ac.jp



立命館大学衣笠キャンパスへは市バスのご利用が便利です。

市バス 12・15・50・51・55・59系統 立命館大学前(正門すぐ)

市バス 101・102・204・205系統 わら天神前(正門徒歩 10分)

京福電鉄(嵐電) 等持院駅(南門徒歩 7分)